



DJスプーキー

「ブッシュは災厄!」「津波義援金を!」。 時代は迅速な行動を求めている。REVIEW

「AFTER (Artists For Tsunami Relief)」
Marquee NY 1月20日

年末にインド洋を襲った津波による犠牲者は20万人を超えた。20万人各々が自然の大波に飲まれ、その20万人をめぐる地球上の多くの人々が、今だその水力の驚異と被害の甚大さを実感できずにいる。今回被害の大きかった地域は長年、民族紛争や深刻な貧困問題に喘いでいたところが多く、救助にも入れない状況が続いているという。そんな国々に対し、アメリカは、個人による募金をはるかに政府の義援金を上回った。そして、小回りのきくニューヨークのアーティスト達も1月20日の夜に津波の義援金を募る「AFTER (Artists For Tsunami Relief)」というパフォーマンス・イベントを開いた。」1月20日といえば、アメリカ大統領就任式がワシントンDCで行われたのだが、その日の昼間、ニューヨークのロックフェラー・センター前のあのスケートリンクでは、『The World Is On Thin Ice With Bush (世界はブッシュのせいで薄氷上にある)』とプリントされたTシャツを着たアクティビストたちが「ブッシュは災厄! 氷はどんどん解けている!」と叫びながらリンクを滑った。もちろんロックフェラーの警備員達が「こ

こは私有地だ!」と警告に走ったが、「ニューヨークはブッシュ・ランドじゃない!」と反撃。まったくたじろく様子もなかったが、観光客らの声援を浴びつつリンクから上がり、「氷が解ける、というのは地球温暖化の警告だけではなく、地球全体の安全への警告だ」とアジをとばした。

さて、本題のイベントだが、参加アーティストは、ルー・リード、デヴィッド・バーン、DJスプーキー、Moby、Living Colorのギタリスト、ヴェノン・レイド等々というクールな顔ぶれ。イベント場所がファッション業界が集うクラブだったため、入場はかなり限られてしまったが、おかげで3メートルの近さで、彼等のパフォーマンスを見ることができた。ルー・リードの自作の詩の朗読、デヴィッド・バーンの大統領就任式批判スピーチ、ヴェノン・レイドたちは「俺達がスリランカに行った時、観光で来ているアメリカ人たちは現地の人たちに一言も『有難う』と言わず当然のごとくかきつけていた。アメリカ人がどれだけ世界で傲慢に振舞っているか考えよう」と語り、トレーシー・チャップマンの『革命について』をドラマティックにパフォーマンスした。圧巻はテクノポップスターのMobyがフォークギター一本でブルース・スプリングスティーンを淡々と歌い上げた語りのステージ!

しみじみと「ああ、ニューヨークにはやはり小回りのきく"真のアーティスト達がいる」と嬉しくなりました。それにひきかえ、映画『イーザライダー』でかつてチョッパーに乗っていたデニス・ホッパーはブッシュ就任共和党パーティーに招待されていたそう! 恥を知れデニス・ホッパー!
(高橋葉子
/ニューヨーク在住・パフォーマンス研究)

INTOWN 日常的??

●2月某日 東京・京橋にあるINAXギャラリー2に「宮本武典」展を見に行く。1974年生まれの宮本は、大学卒業後、バンコクにある日本人学校へ美術教師として赴任したというユニークな経歴を持つ。今回の展示では、その日本人学校の生徒を写真に収めている。黄金色っぽい画面や、人物が写っている背景の植物模様の壁紙は、南国的なイメージだ。映し出された生徒は同一人物のはずだが、鏡と向き合っているかのように左右対称に並んでいる。双子のように見えるのは、宮本自身が実は双子であるということの表れか。写真と鏡が並列して置かれている展示で、はっと自分の顔を見てしまう。本当は私も二人いるのかもしれない、と、見えない片割れを思う。別シリーズでは、風景写真も幾何学的でシンメトリーに対象を写し出している。人や物を対照的に並べて見るという不思議な感覚。普段私がしている単純な「見方」よりも、想像力をかきたてられた。2月1日(火)～2月24日(木)に開催。(藤田千彩)

●2月某日 東京・銀座にあるギャラリー本城にて「山下律子」展を見に行く。性別や年齢の分からないスキンヘッドの人類が、「買い物をする」などの「日常的」な行動を描いている。イラストではない。絵具を厚く塗り、ニードルと呼ばれる針で表面を削り、その上から色のついた絵具を塗る、という手法をとった「油絵」なのだ。こんな技法を用いながらも、この細やかな表現はすごい。おまけに、シュールでポップでちょっとコワイ、そんな絵のモチーフも印象深い。本物を見ないと分からないこの凄さ。じっと絵を見ながら、空想の旅に出てしまい、くすっと笑って、一本取られたッという感じがする。「山下律子」展 2月7日(月)～2月26日(土)(藤田千彩)

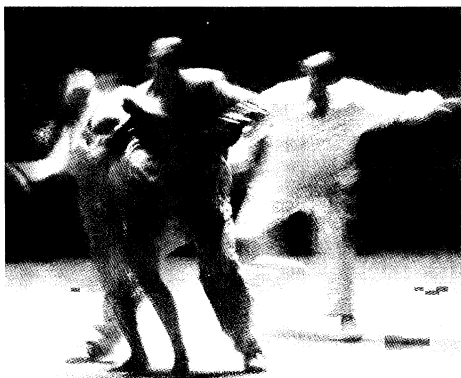
「ジュマンー狂気」来日

アラブ現代劇シーンのトップと言われる演出家ファエデル・ジャイビの作品が東京国際芸術祭の招聘で初来日する。チュニジア人の女性精神科医師と患者たちの実際の対話記録に基づき、首都チュニスの貧困層に育つ若者を見舞う差別、暴力、人間不信などの問題を鋭く暴きだす。2001年カルタゴ演劇祭では一夜で10000人の観衆を集め、2002年にはアヴィニョン演劇祭でも上演。同芸術祭ディレクターに観劇報告を寄せて貰った。

昨年末、この芝居はミラノのピッコロ劇場にかかっていて、東京国際芸術祭の海外を担当する相馬千秋と私はそこに出かけていった。チュニジアの芝居を、アラビア語上演、イタリア語字幕で見るといふなんとも不思議な体験だったが、それでもやはり良い芝居は伝わるものだと再確認した。

アラブ社会の崩壊は、そこで社会的権力を握ってきた男たちに決定的ダメージを与えているようだ。恐らくは権力を無自覚に握ってきた男たちの精神世界は本当はかなり脆く、現実を受けとめ、引き受けることにはや耐えられないようだ。若者の心は限り無く病んでいるとしても、それを支える家族はすでにない。女たちが「母親」を演じることをしなくなれば、現代の家族は崩壊するだけなのだろう。それでもチュニジアの若者は精神科医の助けをかりて、腐った制度に立ち向かおうとするのだが。

芝居を見たあと、演出家のファエデル・ジャイビと話す機会をもてた。彼の意図は精神科医を通して、腐った制度を暴くというかなり知的な作業することにウエイトが置かれているようだが、私には家族や社会の崩壊が一方的に男たちに

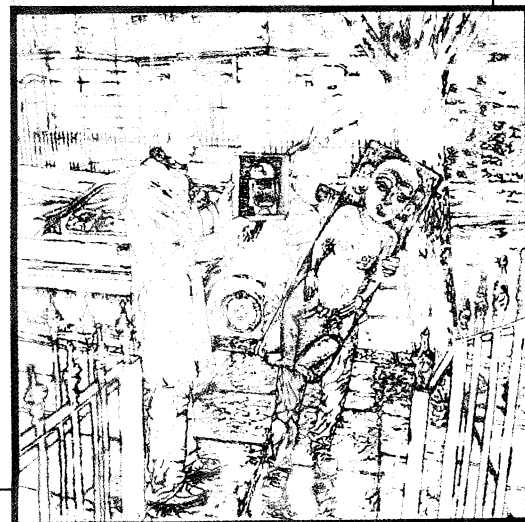


内面の危機をもたらすように読みとけた。果たしてどうなのだろうか。もう一度東京で見て確かめたいと思っている。

どちらにしても、生きることへの真剣さは日本の若者の比ではないし、同様に芝居も真剣勝負となっていることは疑いようもない。

(市村作知雄
/東京国際芸術祭(TIF)ディレクター)

ファミリア・プロダクション「ジュマンー狂気」
(チュニジア)
3月18日(金)～20日(祝・日)
パークタワーホール
問合せ:東京国際芸術祭(TIF)
TEL. 03-5961-5202



※そう言えば、イラク戦争反対の演劇人集会は、今こそ占領に反対すべき時だ。

「人形の家」にテニスボールを投げ込み、シュニツラーをラップする、フランケンズの冒険

COMING!

中野成樹(POOL-5)+フランケンズ『ラブコメ』(原作/モリエール『女房学校』)
3月28日(月)&3月29日(火)19:30 麻布die pratz M.S.Aコレクション参加作品

中野成樹(POOL5)+フランケンズは、今まで横浜の小劇場STスポットを拠点に地道な活動を続けてきた。まだ知名度は低いかもかもしれないけれど、去年はチェルフィッチュと共にSTスポット2004契約アーティストに採用されてもいて、要注目グループだ。フランケンズの特別なところは、一貫して翻訳劇にこだわる、そのスタンスにあると書いていこう。

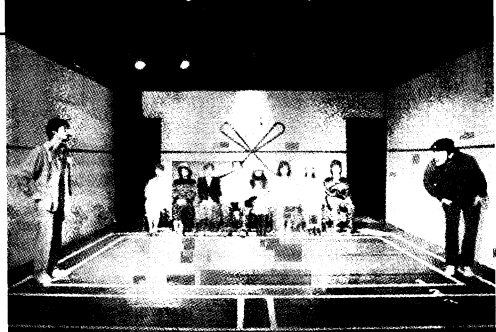
2003年初夏、利賀演出家コンクールの応募作品でもあった「人形の家」がSTスポットで上演された(第三幕だけの抜粋版)。そこでは、抽象化された舞台装置の中で、いまだきの服装をした若者たちによって、奇妙に冷ややかなドラマが展開される。舞台の両脇には、いくつか窓がある白い板の仕切りがあって、作中、テニスボールらしきものがドラマの進行とは無関係に投げ入れられる。舞台の枠を可視化しつつそれを微妙に揺るがせる装置が舞台に組み込まれているのだ。これが、私が初めて見たフランケンズだった。その緻密で繊細な造形の確かさと戯曲に対する奇妙な距離感に知性を感じ、がぜん注目することになる。

2003年秋、シュニツラーの「輪舞」を二場面ごと

別々の演出家が舞台化するというSTの企画でフランケンズが担当した一挿話は、台詞をすべてラップ化するという離れ技で上演された。ラップも、トラックから作り上げていているらしく、それなりにさまになっている。もう一つの挿話は夫婦漫才化されていたのだが…。

登場する女の子はブランド名が大きくかかれたジョッピングバックを肩にかけていたりして、一昔前のウィーンの風俗劇が、渋谷かどこかの雑踏の一幕に変容する。蛍光灯の卓上スタンドをいくつか床に並べて照明にしている。舞台に投入された家電製品が放つ醒めた光は現代美術のように美しく、舞台をささやかに異化しているようだ。

フランケンズの公演では、しばしばクレジットに「誤意訳」という言葉が使われる。それは、原作のドラマを換骨奪胎して現代日本の文脈にあてはめる、いわば「意訳」の徹底ということなのだろう。しかし、それは翻案とは違う。ほどよい意識で翻訳の印を消し去ってしまうのではなく、むしろ意識の徹底によってそれが翻訳に他ならないことを明らかにし、原作と翻訳との隔たりをも浮き上がらせるのだ。そこで、演技はあくまで演技と



いう造形に他ならず、もはや再現の手段ではない。

中野成樹の「翻訳劇」へのこだわりに一貫した理由があるとしたら、きっと、原作と翻訳との落差の中に演劇が演劇として成り立つ場所を見ているからなのだろう。戯曲の翻訳においては、劇的な関係を立ち上げる、言葉の端々に埋め込まれた微細な身振りの翻訳不可能性に直面せざるを得ない。しかし戯曲の翻訳とは、異なった身振りの体系がぶつかり合う中で、演劇を成り立たせる元素的なものが運動する様子が際立ってあらわれる場でもある。

そのような翻訳というせめぎあいの中で、身振りの衝突からはじき出されるようにして生み出される「誤意訳」が形成する舞台は、西洋の演劇の理念を摂取することから始めて奇妙に閉ざされた領域を形成するに至った日本の現代演劇が抱えている歪みや断層を、そのまま露呈させる装置としても働こう。

2004年のフランケンズは、ワイルダーやサローヤンといったアメリカの劇作家の近頃あまり顧みられなくなった戯曲を取り上げ、アメリカと戦後日本の類縁性とその隔たりの中に浮かび上がるような上演を実現した。この春、フランケンズはdie pratzが主催する演劇祭「MSAコレクション」に初参加する。今度はモリエールの『女房学校』を原作に『ラブコメ』と題した作品を上演するのだとか。喜劇の古典を誤意訳して、演劇史にどんな亀裂が走ることになるのか、期待したい。

(柳澤 望/法政大学大学院博士課程・哲学専攻)

●フランケンズのレビューは
<http://d.hatena.ne.jp/yanoz/>にもあります。



亡霊が綴る昭和のお笑いの世界。これぞ、夢幻能の小劇場版なり

REVIEW

鳳劇団『昭和元禄桃尻姉妹』
2月15日(火)・16日(水)タイニイ・アリス

題名に「昭和」と入っているように、この芝居では、「浪速恋しくれ」や「今日までそして明日から」などの歌、佐藤栄作、アベベ、鬼の大松、伊勢湾台風ほか多数の固有名詞、ポコペン、オタンコナス、スカシッペなどのある種の遊戯言葉、糸電話、二人羽折、お人形ゴッコといった遊びなどなど、昭和の時代を想起させるものが、かちゅよ、康実斜の2女優が続ける不思議なかけあい漫才調の対話からポンポンポン飛び出してきた。作品の中核をなす重要な言葉は、東京大空襲だ。1945年3月10日にアメリカ軍が一晩で10万人を死傷させた殺戮作戦である。

2女優は、かっぼれが聞こえる幕開けの温泉宿の場から、コミカルないい味を出す。宿の仲居の婆に扮するかちゅよは、顔にスマいでしわをいれ、半端な花魁言葉で、お客さん、ここは子宝の湯であります、と、いきなり風船みたいに腹を膨らませて足をひろげる。その、しよもない感じに思わず笑う。この異様な婆アと、なぜか一人で逗留し始めた若い女客の康実斜が、下ネタも大股開きもりの珍問答を繰り返す。わっはっは。そうか、この下品でどこかうら寂しくもある、温

泉下ネタ芸とでもいうべきお笑いそのものが、昭和的風土の特産物というわけかと妙に納得。それから場面が若い女客の深川の生家に飛ぶと、彼女は中学生くらいで、いなくなった姉を思っで悲しんでいる。彼女の追想の中で、姉妹は糸電話や、人形ごっこをして遊ぶ。そんな場面が続くうちに、この二人が、東京大空襲で死に別れた姉妹の亡霊なのだと判ってくる。舞台上人間の気配を濃密に漂わせている登場人物が、いつのまにか、そのままの姿で亡霊になっているという、鳳一流の作劇術である。私は思わず微かな戦慄を覚えた。昭和という時代を象徴する東京大空襲で死んだ二人の女が霊となり、昭和的言辞とギャグをまきちらしながら、平成へと流れる時間の大河を今に彷徨っている。その忘却の河から、幾度か繰り返される「あの戦争がなかったら」という叫びとともに、死者たちが迫ってくる、そこらへんにいる少女とおばさんの形をして。丹念に言葉を採集して構成された、言わば夢幻能の現代版のようなテキストとそれを支える熱演。昨今の小劇場の大きな収穫である。

さて、では昭和とは何なのか。この芝居では、構成上の骨格としても、また表現上のオブセッションとしても、距離あるいは遠さが重要な役割を担う。姉妹が死んだ深川と遠くの温泉宿との距離。1945年と現在との



距離。悲哀は全て地理的、時間的距離と密接に関わる。遠ければ遠いほど悲しい。それは、あの時代の一つの本質だったかもしれない。(井上二郎)

おとぎ話の世界に行ってみたらそこも現実だった。この哀しき堂々巡りの出口とは。

南船北馬一団 「にんげんかんたん」
 ◎2月4日～6日タイニイアリス
 ALICE FESTIVAL 04参加公演

私はどこにいるのだろう、私はどこに行けるのだろう、私はどこに行けないのだろう。姉妹は舞台をぐるぐると動き回りながら、指をさす。「おうち、喫茶店、パーマ屋さん、電気屋さん、おうどん屋さん…。」どんな小さな町でも、「おうち」から出て歩いて行けば、いろんなお店があって、働いている人に会って、楽しい思いをして、また「おうち」に帰ってこられる。バスに乗れば、「ゼロ番地」に向かって、また別の暮らしを見つけることができるかもしれない。でも、私はどこにも行けないのではないのだろうか。誰かを待っても、いつまでも誰かは現れないように。

新宿「タイニイアリス」で2月、南船北馬一団「にんげんかんたん」(作・演出、棚瀬美幸)が上演された。目覚まし時計のベルの音。時が確実に刻まれている

ことに耐えられずに叫びをあげる少女。その叫びを柔らかに受けとめるように彼女の姉が現れ、「向こう側」の世界が開かれる。

たぐらみは「不思議の国のアリス」だと気づく。どのような「おとぎ話」がはじまるのか、期待とかな不安を感じた。不安には理由がある。アリスは、土手で本を読む姉と離れて落とし穴から向こう側の世界に入っていくというのに、舞台上のポシェットを肩からさげた「ごく普通」と設定されたであろう「ひろ子」は、向こう側で姉と出会うのだから。

「ひろちゃん、遊びに行こう。二人で昔みたいに、遊ぼう」「…私の時間…私とお姉ちゃんの時間」

「おうち、喫茶店、パーマ屋さん、電気屋さん、おうどん屋さん…」

観客はここで、ある「転倒」に思い至るに違いない。舞台にある不思議の国は、少女が夢想する日常の世界だということに。

つぶれたパンを売るパン屋の夫婦、姉妹の振る舞いすべてに笑いこぼる喫茶店の三姉妹、一生醒めない酒を売る酒屋の兄弟。いずれもチェシャ猫や、三月ウサギや、ハートの女王ではない。彼らがどんなに奇妙な遊びや言葉遊びをしても、ファミレスで皿洗いをしているフリーター、さびれた商店街の経営者、コンビニでマニュアル労働をする若者たちの姿が見えてくるのはなぜだろうか。夢のなかでさえ閉じられてしまった逃げ場のない日常。期待をこめて「ゼロ番地」行きのバスに乗ったとしても、「ぐるっと回って戻ってきます。

アジア各都市をネットワークで繋ぐ新宿の小劇場
TINY ALICE より最新レビュー
 ～「ALICE FESTIVAL 2004」の公演から

ただそれだけです」と突き放されてしまう。

いま、ここにいることへの絶望を読みとるのはたやすいかもしれない。姉との思い出を奪われ、引きこもる「ひろ子」を、たとえば拉致や犯罪の被害家族にみたてることも可能かもしれない。しかしもっとも重要なのは、寓話のなかに放り込まれた日常が、本当の日常以上に閉じられているというのではないだろうか。「転倒」された寓話は、逆に「小さな世界」の虜囚としての私たちを、静かに映し出したのかもしれない。

酒屋の兄弟は、ひとりとは耳が聞こえず、ひとりとはしゃべることができず、お互いの夢のなかでしかコミュニケーションできない。「ひろ子」が夢のなかでしか、不在の姉に会えないこともそうだが、もっとも近い人が「不在」であるという私たちの日常なのかもしれない。結末で「ひろ子」がひきこもった部屋から外へ出ていこうとするのは、かすかな希望なのかもしれない。しかし同時に、かすか過ぎるということも感じざるを得ない。題名の「にんげんかんたん」は、「ん」とをれば「にげかた」となる。それは逆説的に「逃げられない」という私たちのことでもあるのだろう。

作家の棚瀬美幸は、ホームの痴呆老人を取り上げた「帰りたいうちに」(2002年・第7回劇作家協会新人戯曲大賞)のように社会問題を詩的な会話で描いてきたが、今回は「初めての寓話」だという。メタレベルで作劇する新たな試みだったようだが、現実社会への批評的な視線は、かわらずに保たれていたと感じた。(東海亮樹/共同通信社文化部)



撮影/宮内ひろし

パレスチナから東京へ、そしてあなたのもとへ。椿昇の「壁」移動計画

パレスチナのアルカサバ・シアターの2回目の日本公演で、アーティストの椿昇さんが、美術を担当する。昨年10月、打ち合わせのために椿さんはアルカサバの劇場があるパレスチナのラマラへ飛び、1週間ほど滞在してきた。折しも、この街に宿舎を構えていたアラブ人議長が死亡する直前だった。アルカサバは2000年に、客席400の劇場と映画上映室とレストランがある劇場施設をこの街にオープンしたが、それから間もなく、イスラエルとパレスチナの関係は悪化をたどり、もう長い間にわたって無差別な攻撃と市民の逮捕が常態化している。向こうへ行って、椿さんがまず感じたこととは――

「演出家のジョージ・イブラヒムと彼のアシスタントがやって来て、いきなり夜を徹しての激論となった。お前は、どういうことを考えている人間なのか? 敵か味方か? 何もかもはっきりしろ、と。日本にいると人間と人間のあいだにカエルの卵のゼラチンみたいな幕があって、あいまいなまらんなことが済んでしまうが、向こうではそういうことはあり得ない。そういう緊張感が、戦争状態のなかで生きているということなのかもしれない」

椿さんと言えば、持続可能な農業社会へのイメージを喚起するイベントとして、竹炭作りのワークショップを国内外で展開するなど、様々なアクションが想起される。今回はどんなプランを仕掛けるのか。「ラマラで一番に強い印象を受けるのは、イスラエルが自治区との境界に築いている長い壁(高いところで8mの分離フェンス)の存在。ゲリラがイスラエル側に侵入するのを防ぐと言っているが、実際には自治区の人々の生活をメチャクチャに分断している。今回の「壁―占領下の物語Ⅱ」の主題もその壁です。そこで、僕は

まず、分離フェンスのユニットの型紙というものを用意して、これでフェンスのミニチュアをみんなで作ろうと呼びかけています。各国のアーティストや知人に広く呼びかけてミニチュアを集め、東京公演のロビーに展示する。まずは分離フェンスの現実を目に向け、対話を始めるための企画です。フェンスの型紙は<http://anj.or.jp/una>からダウンロードしてください」。

この記事を読んだ人も「ぜひ、送って欲しい」とのことである。「壁―占領下の物語Ⅱ」では、分離フェンスで寸断された市民生活の悲喜が、生活者の視点からユーモアを交えて感動的に描かれる。その舞台美術は「壁を思わせるアブストラクトなものにする」。椿さんらしい圧倒的なインパクトをもった造形に期待しよう。パレスチナから東京へ、練達の俳優たちがかの地の人々の心を伝える貴重な公演だ(CUT. I)。

椿昇――1953年 京都生まれ。多彩な表現を駆使するメディア・アートで世界に知られる美術家。2001年横浜トリエンナーレでは高層ホテルの側面に長さ50mの巨大バツを展示。現代社会の現実に対して様々なアプローチを続ける。IMI大学院講座ディレクター、4月より京都造形美術大学教授。



撮影/古軸泉

芸術文化を支援、発信するNPO
アートネットワーク・ジャパンより
MONTHLY LETTER Vol.15

戦火に晒され、壁に分断される現実を市民の視点から描く名作。

アルカサバ・シアター 「壁―占領下の物語Ⅱ」

[アラビア語上演日本語字幕付]

3月10日(木)～15日(火) 新宿パークタワーホール

問い合わせ/東京国際芸術祭(TIF)

TEL. 03-5961-5202 tif@anj.or.jp

<http://anj.or.jp>

★東京国際芸術祭'05 ～3月28日

◎創作ネットワーク実行委員会+Ort.d.dプロデュース

「昏睡」にしがも創造舎 2月24日(木)～28日(月)

◎飛ぶ劇場「Red Room Radio」

東京芸術劇場小ホール2 3月11日(金)～13日(日)

◎アルカサバ・シアター「パレスチナ」

「壁―占領下の物語Ⅱ」パークタワーホール

3月10日(木)～15日(月)

◎ファミリア・プロダクション「チュニジア」

「ジュヌーノ狂気」パークタワーホール

3月18日(金)～20日(祝・日)

◎フォルクスビューネ「ドイツ」【終着駅アメリカ】

世田谷パブリックシアター 3月25日(金)～28日(月)

★リージョナルシアター・シリーズ

◎劇団無限楽団社【松山】「BARBER ORCHSTRA」

東京芸術劇場小ホール1 3月2日(水)～3日(木)

◎劇団人工子宮【名古屋】「なつのもゆき」

東京芸術劇場小ホール1 3月5日(土)～6日(日)

◎トリコ・A・プロデュース【京都】「潔白少女、募集します」

東京芸術劇場小ホール1 3月8日(火)～10日(木)

◎劇団千年王国【札幌】「SL」

東京芸術劇場小ホール1 3月12日(土)～13日(日)

◎大阪市立芸術創造館プロデュース【大阪】「背くらべ」

東京芸術劇場小ホール1 3月17日(木)～20日(祝・日)

～何かの病原菌に犯される錯覚に陥ってしまいそうな先進的で衝撃的なディ・プラッツ芸術祭～

OM-2の俳優・中井寿典にインタビュー

●昨年に行った時に「今年はいろいろ観に行く」と宣言していましたが、最近いい舞台を観ましたか？

中井：今年の正月に池袋演芸場に新春奇席を観に行きまして、落語って初めて観たんでして短い持ち時間で入れ替わり立ち替わりいろんな人が出てきて楽しかったです。実際に観ると想像していた落語とは違って、古典ばっかりじゃなくていろんな方法があるんだなど。電飾のついた羽織着て、顔もなんか漫画の「ダメ親父」みたいで出てきただけで可笑しい人とかいて…まあそれは5分くらいで飽きてしまいましたが、落語にたいする固定観念みたいなのはなくなりましてね。でも最近観たいですね観た後にアワアワしたり妙に冗舌になったりすることは…月に3本程度しか観てない身の上ではあんまり贅沢な事は言えないですけど。

●なかなか面白いのはないと…？

中井：そういう訳じゃないですよ。そこそこ何を観ても楽しめるんですけど、パツて引き込まれないんですよ。テレビとかもすぐに飽きてしまう。野球がシーズンオフになってからはスポーツニュースすら見なくなりますからね。駄目ですな文句ばかりで、口先番長ですな。

●3月に新作公演を控えています。今回はどんな感じになりますか？

中井：前回OM-2としては初めて既成の戯曲「ハムレットマシーン」に取り組んだんですけど、まだやりたいことが残っているのをもう少し突っ込んで、別のスタイルにして行こうと思っています。まあ前回、評判が良かったってことは関係なくヒョイって乗り越えたいですね。会場も馴染みのない場所（ムーブ町屋）ですけど23区内です千代田線で大手町駅からすぐなのでけっこう足を運びやすいですよ。駅からすぐですし…

●OM-2ではどのように作品を創っているのですか？

中井：自分がやりたいことを稽古場に持って行く個人作業がまず最初にあつてですね、それをみんなであっただういりり言って、何度も練り直していく共同作業に移るとい感じですね。以前はもう少し個人に依るところが大きかったんですけど、少し変わってきたかもしれない。あと今回は最初から二人やら三人で創ったりもしてますね。個人的にはよく夜中に神楽坂の公園とかで稽古したりしてましたね。稽古場だけでは追っつかないんで…

●この間、神楽坂の「ジョンサン」で爆睡してましたね。

中井：…寒いですからね、外。あと夜中はやっぱり眠くなりますよ。

●今回の作品も海外に持って行くのですか？

中井：まだ判りませんが、うまくいったら持って行きたいですね。

●次回以降の公演予定を教えてください。

中井：9月にヨーロッパツアーと10月に韓国でのフェスティバルを予定しています。国内公演はまだ決まっていないです。どこかいい場所があるといいんですけど。

JOIN IN THE PICNIC 期待の公演情報

◆神楽坂die pratze 3/8(火)&3/9(水) NOsense 「椅子からLOCUSへ」

◆麻布die pratze 3/18(金)~3/20(日)19:00 3/21(月・祝)17:30 雑肉工房 【月光の遠近法】

◆この間、神楽坂の「ジョンサン」で爆睡してましたね。



OM-2 『作品No.3』



3/16(水) 19:30
3/17(木) 19:30
3/18(金) 18:30
会場：ムーブホール 問合せ：神楽坂die pratze tel/fax: 03-3235-7990

出演=佐々木敦、中井寿典、柴崎直子、丹生谷真由子、村岡尚子、他 構成・演出=眞壁茂夫 舞台美術=池田包子 舞台監督=長堀博士 照明=内山洋子 音響=斎藤瑠美子

●眞壁茂夫を中心に1987年に結成。以来、前衛的で実験的な作品を次々と発表。1994年より海外公演活動を始め、ポルドー、NY、ワルシャワをはじめ、ヨーロッパ、アジア、アフリカなどの国際フェスティバルに数多く招聘されている。ここ数年は、台本を完全に排除し、俳優、スタッフによるコラボレーションともいえる作品を発表し、新しい創作スタイルを打ち出している。今回は、2005年秋に予定しているヨーロッパツアーと韓国公演に向けての新作を発表する。会場：ムーブホール

TINY ALICE

新宿区新宿2-13-6 光垂ビルB1 tel&fax 03-3354-7307

3/3(木)~3/6(日) 劇団 FUGS! 「ヒロイン戦隊JJ」 090-9847-5563

3/8(火)~3/13(日) Big Smile 「paper planes」 03-5386-5880 info@bigsmile.biz

3/18(金)~3/21(月・祝) HUSTLE MANIA 「青青青!!!」(ブルーシー) 090-4099-5626 (滝沢)

3/24(木)~3/27(日) project サマタポロジュー 「そういえば忘れた」 03-3247-5004 http://www.somecut.com/

神楽坂 die pratze

〒1162-0812 新宿区西五軒町2-12 T&F 03-3235-7990

3/4(金)~3/6(日) 劇団X-tension 「フル・コンサート~Non encore Non cheer~」 tel.070-6464-6661

3/8(火)&3/9(水) NOsense 「椅子からLOCUSへ」 tel.090-1262-3586

3/10(木) LUNE NEO PERFORMANCE 「あんとあたいのセラナーダ?怒ひ違い?」 tel.03-3235-7990 (神楽坂die pratze)

3/12(土)~4/10(日) 第9回ビックリハウス風演劇フェスティバル

3/18(金)~3/20(日) 3/18(金)~3/21(月・祝) 雑肉工房

3/22(木)~3/27(日) ASSH 「トーチキョーより行先不明の穴に落ちて」 問=03-5489-3696

4/1(金)~4/3(日) 1176エグリントン 「naivete」 問=090-1916-6463 (劇団)

作=鮎月達矢 演出=振付=谷口聖一 振付=PONTA 鈴木愛
出演=おおのゆうこ 小村作真 花田麻由子 他
■ 鶉露「ウソノコトノハ」
4/8(金)~4/10(日)
作・演出=江戸川崇 出演=熊倉裕二 前藤涼子 伊智生士治 高田麗士 慎公輝 大場秀行 わたなべみつお 他

麻布 die pratze

〒106-0044 港区東麻布1-26-6-2F T&F03-5545-1385

die pratze M.S.A. collection 2005 ～何かの病原菌に犯される錯覚に陥ってしまいそうな 先進的で衝撃的なディ・プラッツ芸術祭～

日程: 3/16(水)~5/5(木・祝) チケット予約: チケットぴあ 0570-02-9988

会場: 麻布ディプラッツ 神楽坂ディプラッツ ムーブホール

■ 中野成樹 (POOL-5) +フランケンズ 「ラプソディ」(原作/モリエール「女房学校」)

3/28(月)&3/29(火) 19:30 構成=中野成樹 演出=村上聡一 福田毅 野島真理 石橋志保

※一般公演! フェスティバルとは関係ありません。

3/4(金)~3/6(日) 劇団天然カールアミル 【Good Morning, Dear】 問=090-3254-1431

3/11(金)~3/13(日) 劇団ドロブラ 「青春亡命記」 問=090-4041-8168

3/15(火) ■ 井上節子パレエ・シアター 「ふたりでGODDOT~女二人でゴドーを遊ぶ~」 問=070-5591-3125

3/18(金)~3/21(月・祝) 雑肉工房 【月光の遠近法】 問=04-7163-9263

3/24(木)~3/27(日) ASSH 「トーチキョーより行先不明の穴に落ちて」 問=03-5489-3696

4/1(金)~4/3(日) 1176エグリントン 「naivete」 問=090-1916-6463 (劇団)

作・演出=荒木英徳 出演=福岡ゆみこ 中島美紀(ポカリソ記憶舎) 泉光典 入交恵 楠木朝子(劇団柳309) 他 ●身体感覚を刺激するエグリントンの新作。芸術家と妻の静かな生活を描く。

schedule for MARCH

schedule for MARCH